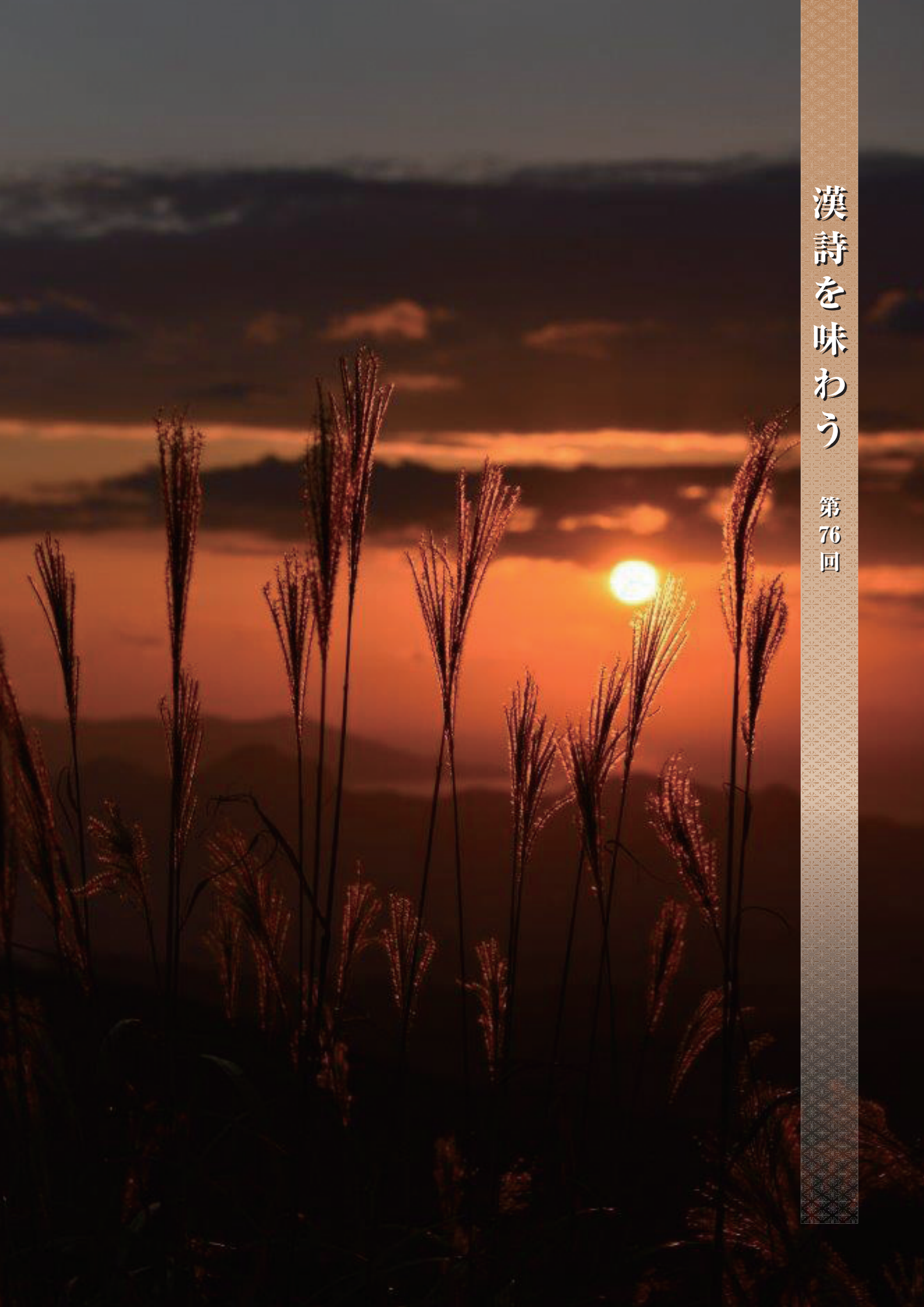


漢詩を味わう

第76回

九月九日憶山東兄弟（さんとうのきょうだいをおもう）

王　維

獨在異鄉為異客　独り異郷に在りて異客となり
毎逢佳節倍思親　佳節に逢う毎（ごと）に　倍（ますます）す親を思う
遥知兄弟登高處　遥かに知る　兄弟の登高する処
遍（あまね）插茱萸（しゅゆ）少一人　遍く茱萸を挿（さ）して一人少かんことを

自分はたった一人で長安の異郷にあって旅暮らしをしている。
この重陽のめでたい節句の日になると、いつもより一層親族のことが思われる。
遠く離れていても目にありあと浮かんでくる――
兄弟たちが連れ立って丘に登って、皆こぞってハジカミを頭に挿しているのに、自分ひとりだけかけている光景を。

《九月九日》重陽の節句
《異　客》故郷を離れて旅をしている者。
《佳　節》めでたい節句。
《登　高》重陽の節句に頭に茱萸を挿し高所に登って薬酒を飲んで邪気を払う習俗。
《茱　萸》和名カワハジカミ。グミではなく、重陽のころ小さな赤い実を結ぶ。

奇数は古来中国では伝統的な陰陽の思想によれば縁起の良い陽数で、季節のかわり目に陽数の連なる日を「佳節」としてお祝いする風習があります。「上巳＝三月三日（桃の節句）」「端午＝五月五日」「七夕＝七月七日」です。中でも一番大きな陽数「九」が重なる九月九日を、陽が重なると書いて「重陽の節句」と定めました。中国では重陽のこの日、人々は茱萸を袋に詰めたり頭にかざしたりして、連れ立って高いところに登り、菊花を浮かべた酒を飲み不老長寿や繁栄を願う習慣があります。重陽節はこのような行事に名を借りて「茱萸節」「登高節」「菊花節」などと言われることもありました。
日本では平安時代に貴族の宮中行事として節句が取り入れられましたが、この重陽節は新暦では晩秋の花というイメージがある菊とは季節感が合わなくなり、前述の四つに正月七日の人日（七草の節句）を加えた五節句のなかでは一番親しみがないようです。しかし今でも九州では「お九日（くんち）」と呼ばれて「長崎くんち」や「唐津くんち」など秋の収穫祭として、新暦の十月に開催されています。これらはみな重陽の節句が源といわれます。
この詩は王維が科挙受験のため長安に留学中に作られたものと推定されています。そうすると、王維はまだ十七歳です。都長安でも節句で賑わっていたことでしょう。その中でいっそうの孤独感をかみしめる若い王維は、はるか遠い我が家へその思いを馳せていきます。承句の「佳節に逢う毎に倍す親を思う」は当時のありのままの気持ちで、その直截的な表現が寂寥感を一層強くさせます。王維の肉親思いは有名で、高官になったころ母を亡くし、ただちに官を辞して喪に服しましたが、悲しみのあまり喪を続けられないほど肉体が衰弱したといいます。また三十歳で愛妻を失ってからは生涯再婚しなかったとも伝えられています。
王維は四人兄弟で、弟の王縉も「九月九日作」と題する詩を残していますので紹介します。
「辺地を将（もっ）て京都に比ぶる莫（なか）れ　八月の厳霜草已（すで）に枯れ　今日登高する樽酒の裏　知らず能く菊花の有りしや無しや」
この詩が詠まれた年は悪天候で田舎の実情は厳しく、重陽節のお祝いムードも半減だったのでしょう。

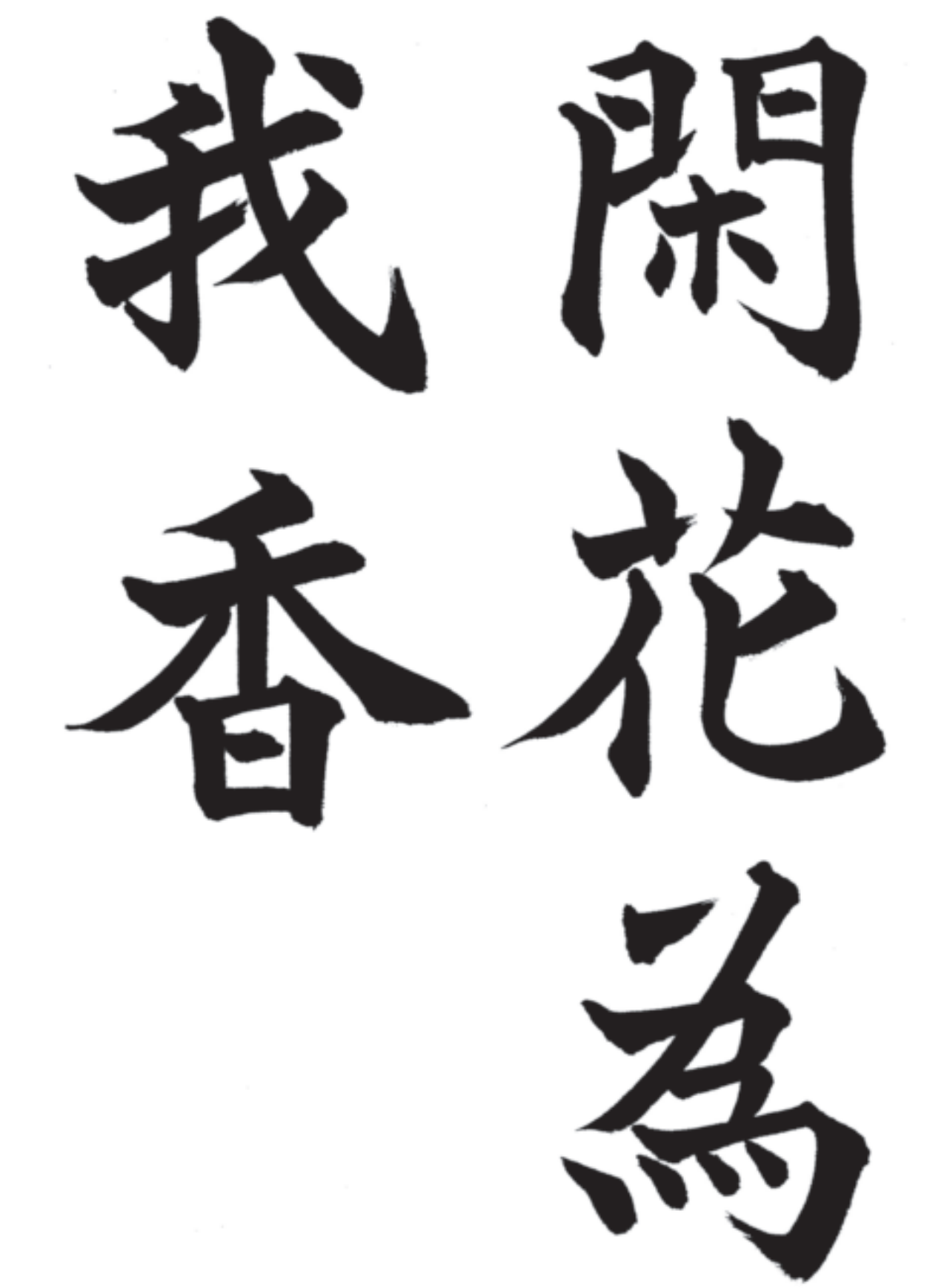
参考文献：漢詩の辞典（大修館書店）・中国詩人選集王維（岩波書店）・唐詩三百首（東洋文庫）

秋は生ず黄葉声中の雨　人は在り清渓水上の楼

《大意》秋は紅葉した葉を打つ雨の中から生じ、そして人は清渓のほとりにある楼上に倚（よ）るのであった。（龔友）

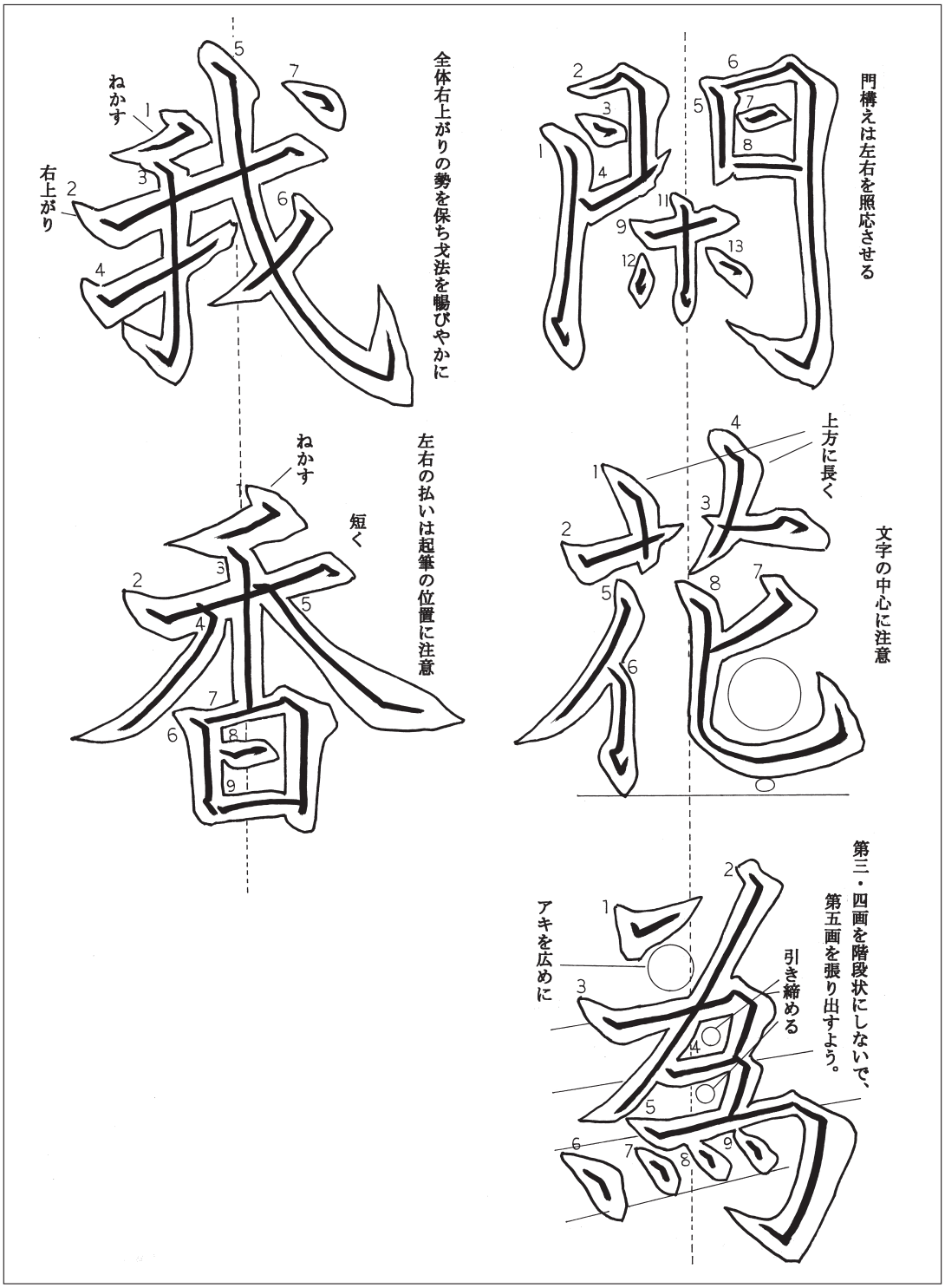
詩情秋水遠く　画意晩山明らかなり

《大意》詩情は秋水と共に幽遠で、画意は夕暮れの山と共に鮮やかである。（沈石田）



読み　閑花　我が為に香ばし（閑花に咲く花はわが為に香りを放っている。・黎簡）

佐藤象雲書



一般部規定課題出品について

・規定課題は段級の区別なく、右掲載の五字句となります。

・初段以下の方に限り、左に掲載してあるように二文字または三文字でも構いません。

・規定課題（楷書）の出品はひとり一点に限ります。

行　書

草　書

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

隷　書

次号課題

肱を曲げて之を枕とす

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

ペン字部課題　（９月30日〆切）

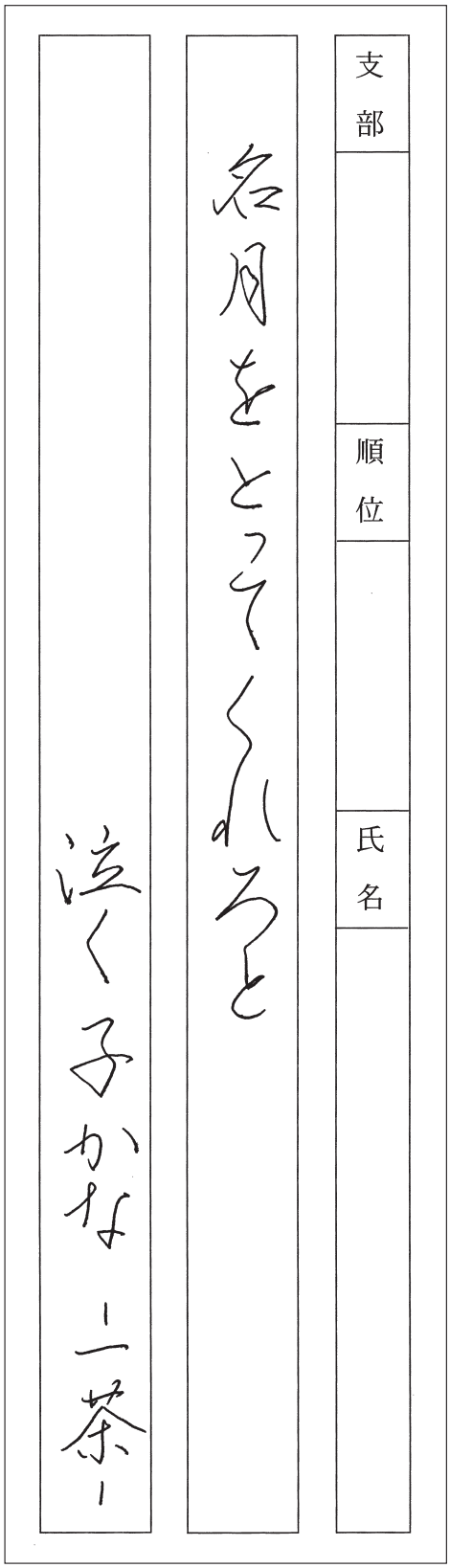
細字部課題　（９月30日〆切）

（両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと）

佐藤象雲書

音　アイイクレイシュ　シンフクジュウキョウ

略解　聖者は人民を愛して安んじて育てた。えびすの国までもその徳を慕って臣民として仕えた。



松尾芭蕉の句

和泉溪石先生書

支部	順位	氏名

■史晨後碑（ししんこうひ）（後漢・西暦一六九年）の臨書 (13)

壽、相樂しむこと終日なり……

象雲臨

『壽相楽終日』

七月号の本欄で隷書の筆法についての書論の一部を紹介しましたが、今月はその続きです。

蚕頭雁尾　筆必三折

「筆画の起筆の処では蚕の頭のように、収筆の処では雁の尾のように最後を反り返らせる。そして運筆には三折法を用いて、右に進もうとする前にまず左（起筆）で一折し、右に進むときに二折し、収筆で三折する」（馬国権・隷書と隷法）

「蚕頭雁尾」は波磔のある横画に代表される筆法で、波のない横画や縦画などではほとんど変化をつけないのが一般的ですが、起筆についてはいずれも蔵鋒を意識して、送筆では線の中心に力がかかる中鋒を守る必要があります。三折は三過折または三折法とも言われますが、線を起・送・収筆の三つの構造で書くという用筆の基本原理です。三折は楷行書体の用筆の基本ですが、この書論はこれを隷書の筆法にも適用して説いています。

品類之盛

象雲臨

■王羲之・蘭亭序（東晋三五三年頃）の臨書(15)

『品類之盛』

王羲之の書とは何か？これは書人に課せられた歴史的な大命題です。歴史に名を遺す書人は少なからず王羲之の影響を受けていると考えられますが、王羲之の書が偉大であっても王羲之風の書をそのまま残している書家は稀です。これは王羲之の書というものは、結体法という小さな枠内に収まっているのではなく、書が千変万化することによって書の普遍性を備え、永続性を獲得しているからではないでしょうか。王羲之の書は狭く解釈すれば、用と美を兼備し端正な実用書の側面を持ち、広く捉えればその変化は無限の書の美の可能性を秘めています。

さて今月の四文字も美しくもあり、変化も素晴らしいものですが、類と盛は筆順の判断が難しく拙臨はあくまで参考に留めて研究臨書してください。